

# ハズリットの恋

——新ピグマリオン譚——

中 川 誠

## I

対象に肉迫する情熱と、逆に対象そのものに備わる美と迫力を Hazlitt は“gusto”と呼んだ。もとは絵画、彫刻、文学について彼が用いた言葉であるが、広くは我々に喜び、あるいは苦しみを呼び起こす物事固有の風味、または力のことである。それを Hazlitt はしばしば、物事の真実とほとんど同意語に使った。Hazlitt によれば、真実は明るみに引きずり出されるのを待って暗闇にもがいているという。その真実を表現する手段が絵画であり彫刻であり、文学である。文字によって表現するためには、その文字は、切れば血が噴出する生命を持つ言葉でなければならない。何か適当な言い方で間に合わせればよいというものではなく、これを表現するにはこれ以外にはないという、決定的な一語である。言いかえれば、真実に迫るために何よりも必要なのは力と明晰さであって、使う一語一語はそれを強化するための決定打としなければならないのである。<sup>(1)</sup> 文章の“gusto”とは、このような文字であり、その文字によってはじめて明るみに出された真実のことである。

Hazlitt が考えていた“gusto”は、人の生き方について言えば、物事の真相を究明するためには安易に妥協しないこと、そして言うべきことがある時は断固としてそれを表現することである。人間を動かす原動力、活力を大切に、それを発揮させる力のことである。これが文人として立つ者の責務と深く結びついていることを、Hazlitt はモンテーニュを読むことによってあらためて思い知らされた。モンテーニュは自分の『エッセー』のことを次のように言っている。

「私がこの本を作ったのではない。むしろこの本が私を作ったので、それは著者と本質を同じくする書物であって、もっぱら私に関するもの、私の生活と切り離せないものである。」(Ⅱ—8)

「私はここに、ただ私自身を明らかにしようと目ざしているだけだ。」(Ⅰ—26)

これが“gusto”である。『エッセー』には“gusto”が充満している。モンテーニュの生命が『エッセー』に生命を与えたのである。古代の詩人が言った「われわれのページは人間を表示するのだ」という気概を共有するモラリストたち(人間探究者)は、「文は人なり」の信念を自分のものとしていた。“gusto”を何よりも尊んだ Hazlitt の文章もまた、Hazlitt その人を表わしていた。文章は、帰するところ、気質の産物なのである。“gusto”は話し方や文章だけではなく、その人の思想と行動のすべてにわたって、大なり小なり、表われてくるであろう。一般の人間関係はもちろん、女性関係も例外ではあるまい。むしろ、人間の最も奥深い欲求と結びつく女性関係の中にこそ、“gusto”は最も顕著な表われ方を見せるかもしれない。Hazlitt の“gusto”は彼の女性関係をどのようなものにしたのだろうか。そして、それは彼の人生にどのような影響を与えたのだろうか。

## II

Hazlitt は女性運が悪かった。子供の頃読みふけた騎士物語や冒険小説に登場するさっそうたる主人公に憧れながら、実際には生来の内気な性質が強まって、ルソーやスタンダールの孤独な夢想家に成長していった。彼らはいずれも、繊細な神経がしばしば外へ向かって激しく反発して人と衝突しては、自分も傷つくという直情径行型であった。そのような Hazlitt を見かねて友人の Lamb 姉弟が彼に縁談をもちかけた。

相手は姉弟の知り合いの退役将校の娘で、いくらか資産もあり、配偶者を求めている33歳の女性であった。Hazlitt は女性の前に出ると物も言えなくなるほど緊張する癖があるため、女性から好かれる男ではないということを自分でもよく知っていた。数年前に湖水地方を訪ねた時、逗留した村の尻軽女の甘言にのせられて手を出し、その仲間の無頼漢たちから危うく袋叩きになるところを、近くに住んでいた先輩詩人 Coleridge の家に逃げ込んでかくまってもらったというような不名誉な思い出もなまなましく、女のことになると自信は持てなかった。そのような彼の弱みをよく知る Lamb 姉弟の勧める女性なら安心して縁談をまかせてもよいと思ったのであろう。姉弟の望みどおり、その女性と結婚式を挙げた。Hazlitt 30歳の時のことである。

しかしこの結婚は失敗であった。放っておけば婚期を逸すること間違いなしと思われた野暮な二人の男女を、結びつけさえすればよいという気持が先行したとでも言えそうな Lamb 姉弟の取り持ちから始まったことである。そもそも、人を茶化すことを好んだ Lamb 姉弟が、どこまで本気で二人の幸せを考えたのかも疑わしい。姉はさすがに女だけのことはあり、相手の女性を親身になって気遣った形跡が手紙に見られるが、弟の方は、どちらかといえば野次馬半分だったのであろう。Charles Lamb という稀代の才人が他人の幸・不幸を軽くあしらうとも思えないし、その後の Hazlitt 夫妻の不運な成り行きを知ってからは、Lamb なりに、常人の推測の域を超えた深い感情が働いていたのかもしれない。しかし少なくとも、自分よりもっと傷つきやすい繊細な神経の持ち主の Hazlitt という友人の幸せを本気で願っていたとしたら、その配偶者を選ぶにあたっては、もう少し慎重な配慮や選択があってほしかったし、その方が Lamb には一層似つかわしかったであろう。Lamb 姉弟は精神錯乱の遺伝を背負って発狂の恐怖にさらされていたから、人並みの温かい家庭を築く夢も希望も持てなかった。二人揃って独身の境涯にある中年過ぎの姉弟が他人に世話する縁談に、とびきりの良縁があるわけもない。彼らの縁談をまともに聞き入れて結婚を急いだ Hazlitt の方も、いささか慎重さを欠いたと言わなければなるまい。

相手の女性は Hazlitt を見て格別の好意を持ったというのではなく、この辺で身を固める潮時だと観念して、Lamb 姉弟の勧める男となら、とにかく結婚してみようという程度の気持でいたらしい。Lamb などは、式場で柄にもなく新郎姿で緊張している Hazlitt を見て笑いころげたという。おそらく、どんなにひいき目に見ても似合いの夫婦とはいえない二人を見て、そのような結婚式の主役を演ずる Hazlitt の姿が Lamb の諧謔趣味を痛く刺戟したのであろう。しかし Hazlitt という、おそらく自分以上に気難しく神経も鋭い奇才が世間並みの結婚式を挙げたり所帯を持つなど、おかしくてたまらぬというのなら、Lamb ははじめから彼に結婚話など持ち出さなければよかったのである。

新婚早々、Hazlitt 夫妻は南英にある妻の持ち家にひとまず落ち着くことになる。しかし近所の娘と Hazlitt が仲よくなったような気配が妻には気に入らず、Hazlitt の方も仕事のためロンドンへ出る必要もあって、やがてロンドンで下宿住まいしながら自由な独り生活を続けるようになって



ゆく。妻は南英に引きこもって気ままな生活に明け暮れ、それから10年もたった頃には二人は完全に別居していた。子供だけは生まれて、生き残った一人息子に Hazlitt は後年、次のような手紙を書き送っている。

「結婚するならお前の好きな人を選びなさい。友だちが勧めるからといってそれにまかせてしまっては駄目だよ。性質の合わない人と結婚すると、後でどんなに努力してもうまくはいかないものだ。お互いの合わない面は、時と共にますます強まるばかりだ。気が合わずに離れ離れに暮らすようなことになるなら、はじめから一緒にならない方がいいにきまっている。愛情のない夫婦生活を続けるほど無益なものはないのだよ。」<sup>(2)</sup>

これを見ると、Hazlitt が Lamb 姉弟の勧めた女性と結婚した時、ただ、生活や身分の安定のための方便として結婚を考えたのではなく、よりよい伴侶を得ることを第一に願っていたことがわかる。夫婦仲がしっくり行かずに別居して独り暮らしをしていた間も、Hazlitt らしい精神の自由独立を楽しんだとばかりは言えないだろう。父親牧師のように、宗教的情熱と個人的な野心に駆られて各地を渡り歩いて、あまり家庭的とは思えない生き方をした男の血が Hazlitt に濃厚に受け継がれていたことは確かであるが、その父親は家庭を持つことができたのに自分はそれに失敗したことを深く悔やんでいた気持が、この手紙に表われている。そのような彼をまもなく襲うことになる残酷な運命は、淋しい境涯にいた彼の心の空白を衝いたものだったのである。最初の結婚に失敗し、それを埋め合わせるような激しい恋に破れ、やがて再婚してそれにも失敗して孤独な死を迎える彼の人生を考えると、やはり女性運が悪かったと言うほかはない。

その息子は、別居した両親の元を行ったり来たり、父親の実家に入ったりしているうちに就学期を迎え、ロンドンで寄宿生活を送りながら成長する。妻はその後も夫の親たちと仲よく交際を続けて、彼らも彼女に好意的であったところを見ると、別居の理由は妻の側に何か特別な落ち度があったということでもないらしい。むしろ、どういうわけか彼らは Hazlitt の方を批判的に見ていたようである。若い時分から一人でフランスへ絵の修業に出かけたりイギリス国内を何度も旅して歩いたり、ロンドンへ頻繁に出てきて下宿したり、というような自由気ままな生活を長く送ってきた上に、一人で行動する癖があった Hazlitt には、家に閉じこもって妻に歩調を合わせるだけの度量も我慢も不足していたのであろう。しかし二人ともお互いに相手の欠点を責め立てたりはせず、あきらめに近い気持で見えていたようである。それほどまでに二人の間の溝は大きく深かったのかもしれない。後年 Hazlitt は、後で述べる一人の若い女性との不幸な恋をふり返って次のように書いている。それは必ずしもその特定の女性一人だけに限ってのことではなく、普遍的に女性全体と、男女の愛憎そのものについての彼の感慨でもあるから、その中には気の毒な妻の思い出も含まれているであろう。

「昔、我々が愛した女たちを、彼らが我々を傷つけたからといって憎むことはしない。《我々は嫉妬から女を殺すこともあるだろう。だが憎みはしない》と Fielding は言った。女の行為とその犠牲になった自分を我々は腹立たしく思いはしても、女を愛する気持はいつまでも変わらない。女が我々を愛さなくても我々は愛したのである。女が我々を憎んでも我々は憎まない。愛は報いられれば無関心になるが、不幸に終わった愛はいつまでも恋しく忘れ難い。」<sup>(3)</sup>

「我々は激情に駆られてすばやく復讐し、長くゆっくりと反省しながら後悔する。」<sup>(4)</sup>

「我々が受けた苦痛の仕返しを、愛する者の頭上に叩きつけた瞬間、我々は当座の怒りを取り払い、永遠の後悔を生み出す。復讐が果たされた途端に女を思ういとしさがよみがえり、その時はじめて、女に与えた傷が、彼女が我々に与えた傷よりもはるかに激しく、我々の中に痛むのである。」<sup>(5)</sup>

復讐を果たすことは一瞬の間の出来事にすぎないが、それが相手に与えた打撃の強さに比例するように、激しい悔恨がいつまでも自分をさいなむ人間の煩悩に思いを馳せていた時、Hazlitt は、嫉妬に狂って妻 Desdemona を殺してしまった Othello のことも考えていたであろう。Othello の苦悩はもちろん、復讐と野望に駆り立てられて身をほろぼす男女の悲しい宿縁を語る時ほど、Hazlitt という人が、奥深く、また情熱的に感じられることはない。よほどつらい経験あつてのことであろう。

Hazlitt は妻の悪口を言わなかった。自分を幸せにしてくれる女ではなかったとしても、自分のような男と生活を共にすることによって妻が受けた傷を思えば、妻を悪く言うことなどできなかったのだ。家庭的な不幸を人に洩らしたりすることもしなかった。ただ、父親の不幸を繰り返させたくないと思ったのであろう。心許せるただ一人の息子を溺愛するように愛し、他人には言えないことも息子には包み隠さず話した。この親密さが、後に再婚した彼の二度目の妻を怒らせ、別れるものともなるのだが、その息子が極端に寡黙であつたことが惜しまれる。生き残った唯一の肉親であつたこの息子が、父親のことをはっきり我々に伝えておいてくれさえしたら我々は Hazlitt のことをもっと多く知ることができたであろうに、彼のうわさを断片的に伝える者は幾人かいても、親身になって彼を伝えようとした者が近くに一人もいなかったのが残念である。もしかしたら、誰よりも身近かにいた息子が知る父親の生涯は、我々が想像するよりも、もっと痛ましかったのかもしれない。

Hazlitt にも青春はあつたし、その青春は、自分の才能が先輩詩人 Coleridge に認められて、文学の世界に躍り出る可能性が開けてきたことを感じさせる前途洋々たるものであつた。その詩人が住む家に向かって遠い道のりを一人旅立った時の思い出は、なんと明るく、希望に満ちていたことか！

「頭上には青空一杯、足もとは緑の草原、行く手に続くのはゆるやかに曲がる一本道、三時間も歩けば夕食だ。それから後は私の大好きな思索の時間が待っている！ 兎も山鳩も姿を現わせ。見わたす限り無人のヒースだ。私は大声あげて笑い、走り、跳び、歌う。」<sup>(6)</sup>

そして John Fletcher の田園詩劇 *Faithful Shepherdess* の牧歌的な一節をそこに付け加えた。

《森は緑に萌え、空気は澄み、その香は甘く、西風は静かにくねる流れの上に舞い、早春の花爛漫とその小川を飾る。》<sup>(7)</sup>

これらは彼の青春賛歌の名篇 *On Going a Journey* のものである。緑の田園風景こそ彼の青春の思い出に最も深くつながっていた。彼が折りにふれ森を散策することを無上の喜びとしたのも、そこに青春の夢を回想したからであろう。



しかし、光が満ちあふれるような青春の旅は、やはり人生の中のつかのまの出来事にすぎなかった。その思い出が楽しければ楽しかったほど、その先に続く旅には暗く悲しいものが多く待ち受けていたのかもしれない。しかしその道中を、彼は旅が終わるまで、ひたすら女を愛し、書き、生きたのだ。彼がこの世に遺した最後の言葉として知られる、“Well, I've had a happy life.”の一語を我々に伝えたのは息子であったが、その場に居合わせた父親の友人、Charles Lamb, Edward White, James A. Hessey, の三人の中、誰一人としてそれを聞いたと言う者はいなかった。しかし、自分を愛してくれた不幸な父親のために息子が遺したせめてものはなむけであったとしたら、その言葉は Hazlitt の生涯に、まことにふさわしかったと言えるだろう。なぜなら、メリメがスタンダールの墓碑銘とした “Visse, scrisse, amò.” (生きた、書いた、愛した) の三語の意味することを Hazlittこそ、力一杯、実践したからである。

### Ⅲ

いろいろな意味で Hazlitt の恋の総決算とも言える Sarah Walker との出会いは、幼い息子が別居中の両親の元を行ったり来たりしていた頃のことである。

妻と暮らした南英の田舎町 Winterslow は、窓の外に林と田園が広がる牧歌的な環境で、そこで読書と思索にふけることを Hazlitt は大きな喜びとしていた。妻と別れた後も、その小さな田舎の町はずれに部屋を借りて独居生活を送りながら幾つもエッセイを書いた。仕事のためロンドンを往復することが彼の年中行事になっていたが、Winterslow は最後まで彼の憩いの地となった。ロンドンに出てきた時の足場は市内の下宿屋であった。ロンドンでは子供の頃から何度も下宿生活をしたことのある、彼には最もなじみ深い都であった。再びその都の真只中に独り住まいの仮寓を探していた時、兄と友人の知り合いの洋服仕立て屋が下宿人を置いていると聞いて、そこに逗留することにした。他の客は同じ二階の並びに単身の男が一人と、若い夫婦者が一組いるだけで、下が母屋になって洋服屋家族が住んでいた。下で家族の者たちが大きな声で話したりすると、上から聞き耳を立てれば話の内容まで聞こえてきそうな、まわりに古い建物が取り巻いている静かな路地の一角であった。これから先、二階の Hazlitt が自分のことを話しているらしい下の家族の者たちの話し声に本当に聞き耳立てて一喜一憂するようなことになるなど、彼にも予想できなかったことだろう。しかし遠からず彼は皆のうわさの種になり、やがて下宿屋を叩き出される運命にあるのだ。

投宿してまもなく、彼が窓に面した机に向かってしていると誰かがそうっと部屋に入ってきて、彼が背を向けている片隅のテーブルにお茶の用意一式を置いて出て行く気配がした。このようなことは今までの下宿住まいでもよくあったことなので、なにげなく礼を言おうとして振り向くと、さっぱりした服装のきれいな顔立ちの娘が戸口で彼の方を振り返ったところだった。彼の眼を誘い込むような目つきで見ていた。女中ではなかった。黒髪を肩まで垂らして、肌が浮き立つように白かった。にっこりとほほえむと、音も立てずにスカートをひるがえして下へ降りて行った。

彼はその後を茫然と見送った。彼女の顔と物腰が焼きついてた。これが彼の、その後の人生に大きな影響を与えることになる Sarah Walker との出会いであった。

彼は物思いにふけた。

「ハテ、今の若い女は誰なんだろう。この家の者か？ なんという魅力的な眼だ。完全に私に好意を持っている眼だった。今まで私をあのような目つきで見た女が一人でもいただろうか。それにあの優雅な振舞いといったら！ お茶を置く仕草もしとやかだったが、姿を消すまでのあの軽やかな身ごなしは、まるで雲の上に乗った天女のような。そうだ、マリー・アントワネットもあ

のような感じだったのだ。女のやさしさ、可愛らしさ、優雅さ、美しさ——、ああ、私の永遠の媚薬！」

たしかにその時、Hazlitt はマリー・アントワネットのことを思ったであろう。処刑されて既に30年を過ぎたフランス王妃を彼が実際に見たことはなかったが、伝え聞くその美貌と優雅な姿は彼に忘れ難い印象を残していた。マリー・アントワネットという外国育ちの、気位ばかり高くてフランス女王としての責任義務を怠って贅沢さんまいに日を送ったばかりか、終生、フランスの国と人民を見下していた傲慢な女性さえいなかったら、フランス革命は、あるいは、あれほど過激な復讐劇にまで発展することはなかったかもしれない。無能な夫のルイ十六世は尊敬に値するというには程遠い人物であったが、それでも彼を憎むフランス人は決して多くはなかった。しかしその王妃を許す人民は一人もいなかっただろう。その一方では、もしも彼女がいなかったとしたら、全ヨーロッパ諸国の対仏大同団結も成らなかったかもしれない。というのは、ヨーロッパ屈指の名門オーストリー王家出のマリー・アントワネットは、ヨーロッパ各国が共有する古き良き時代の美と権威の象徴であり、ヨーロッパ社会が何百年もかけて築き上げた貴族的美しさの結晶でもある彼女を断頭台に送ったフランス人民の野蛮行為は、旧体制を守ろうとするヨーロッパ諸国民には断じて許せなかったからである。その美貌と威厳が天下に謳われた貴族社会最後の仇花マリー・アントワネットの処刑は、他国の者にとっては身の毛もよだつ恐ろしいことであった。

マリー・アントワネットの優雅な姿は、この世のものとも思えないほど、見る者を感動させたりしい。Edmund Burke も彼女を間近に見たイギリス人の一人であるが、彼は全盛時代の王妃を眼の前にして、その類いまれな美しさに打たれたことがあった。それほどまでに崇高な美を生み出した旧秩序を王妃もろとも葬り去ろうとするフランス革命の成り行きを Burke は憂えた。同じ頃、彼女を見たもう一人のイギリス人が Hazlitt に伝えた王妃の印象も、Burke のそれと同質のものであった。そのイギリス人は画家であったが、次のように言っている。

「ヴェルサイユ王宮でのことだった。扉が開いて美貌の女性が私のすぐ目の前を通り抜けたことがあった。マリー・アントワネットだった。その扉は狭かった所以她は身体をややななめにして、鯨骨の張ったスカートに手を触れながら通り抜けたのだが、その時の王妃は、まるで白い雲の一つのかたまりに乗って運び去られるようだった。」<sup>(6)</sup>

Hazlitt の書いた演劇論などにも窺われるように、彼は女優を見る時にもそのような傾向があったが、女性の美しさを顔立ちだけではなく、彼女の動作全体から漂う雰囲気から見て取ることを好んだようである。それが優雅であるかどうかが一番肝心なことだと考えていたらしい。

「女性は顔の美しさよりも、動きの優雅さの方が一層魅力的である。」<sup>(7)</sup>

動きの中に美を見るという彼の傾向は女性の場合に限らない。自然界の風物にも及んでいる。

「美しい動きは継続と微妙な変化の中にある。鷹の動きの美しさは、翼をおさえながら繰り返す旋回に、もしくは、餌物に向かって一直線に突っ込む、あの線の動きにある。私たちは子供の頃、アザミの毛がキラキラと輝きながら風に乗って空に舞い上がって行くのを見守ったことがあるだろう。あの揺れ動くさまを見るのは幻想の世界に遊ぶような心地であった。なんと楽しく美しかったことか！」<sup>(8)</sup>



Hazlitt の絵画論にもあるように、落日の空を描いた絵など、刻々と移り変わる空の色彩の微妙な動きがどのように表現されているか、あるいは樹木の森が風景全体の中でどのように生きているか、雨風の中でどのように揺れ動いているか、また人物画の場合は、静止した表情が内の生命をどのように表現しているか、に彼は特に関心を持った。女性はもちろん、一つの物体が持つ雰囲気や、それが我々に与える印象は物自体に固有の生命、あるいは原動力の発露であって、それを通して我々は事物の本質を掴むことができるからである。

マリー・アントワネット 処刑からはほぼ30年が過ぎて革命の動乱はナポレオン戦争に引き継がれ、そのナポレオンもセント・ヘレナにまもなく没しようとしている頃のロンドンの下宿屋の一人の娘がフランス王妃を気取っていたとは考えられないが、少なくとも Hazlitt にはその娘は彼の理想の乙女の一つの具現化であった。彼女との恋の顛末を *Liber Amoris* (愛の対話と手紙) に書いた時、彼はそれに “The New Pygmalion” という副題を付けた。乙女の理想像を象牙に刻んで日夜それを愛撫しているうちに、自分の愛が報いられないことが切なくなり、生きている本物の乙女が欲しくなくなったというギリシャ伝説である。本物の乙女といっても、それは自分が彫った理想の乙女でなければならなかった。愛の女神に祈願したところ願いが聞き届けられて、彫刻の乙女像に生命が吹き込まれ、二人一緒に幸せに暮らしたという。Hazlitt の *Liber Amoris* の結末は伝説の Pygmalion とは似ても似つかぬ悲劇に終わるが、Hazlitt は「不幸な現代版ピグマリオン、かくありき」というような気持で、報いられぬ恋物語の中に自嘲と憐れみと見果てぬ夢を込めて、その名に自分の思いを託したのであろう。

Sarah Walker の目立つ特徴として伝えられているのは、その眼と動作振舞いである。相手が男性となると、Hazlitt がはじめて会った時のように、深く誘い込むような目つきで見つめたという。その物腰には静かに風の立つような、軽やかで優雅なものがあり、それを彼女は自分でも得意としていたともいわれている。目つきといい、身ごなしといい、いずれも男性の気を引くためのコケットリーに違いないが、それも熟練したものになると、女性のそのような仕草に心動かされやすい Hazlitt に対しては効果きめんであった。現に彼は、今までの行きずりのような幾つかの恋では経験したことのない激しい感情に捉えられてしまうのである。

その娘の名が Sarah であったことも、もしかしたら彼の恋情をそそる上で何らかの働きがあったのかもしれない。というのは、彼の恋はすべて片思いであったようだが、そのような初恋の中でもひととき強烈な印象を残した女性が Sarah という名であったからである。若かった頃の芝居好きの彼を熱狂させた女優 Sarah Siddons のことである。舞台に美しく咲く彼女を客席から見つめていただけだから、文字どおり片思いではあるが、それでも彼の青春を彩った忘れ難い女性であったことに変わりはない。その Sarah は Mrs Siddons と呼ばれて悲劇専門の名優であり、特に Lady Macbeth を演じては右に出る者がいないといわれた、イギリス演劇史上、名高い女優である。その華麗な風貌と動作は静かな威厳に満ち、妖艶さには満場の客が息をのんだという。Hazlitt は彼女の芝居を何度も見に行った。熱烈なファンであった。彼は心の中で Sarah の名を何度も口ずさんだに違いない。後年の Hazlitt はさすがに目もこえて、名優の名をほしいままにして役者の域を越えたような仕事に手を出したりする Mrs Siddons に対して、きびしい批判を下しているが、その時の彼の目は、ただのファンではなく、既に鋭い批評家のものであった。しかし若かった頃の彼は Mrs Siddons の中に理想の女優と女性を見ていたのである。彼女の演ずる Lady Macbeth をはじめて見た時の思い出を次のように語っている。

「彼女は私を圧倒し、溺れさせた。涙があふれ出てきて止まらなかった。芝居が終わった後、私はものを考えることも、身動きすることも、できなかった。」<sup>101</sup>

「彼女の Lady Macbeth を一度でも見たら、それを忘れることはもうできない。我々を畏れ、ひれ伏させるために悲劇の女神が舞台に舞いおりてきたように思われた。……我々の記憶は年々うすれて行くが、Mrs Siddons が我々に与えた印象は永久に消えない。」<sup>102</sup>

妻の名も Sarah であった。たとえ今はお互いに別居中の身であるとしても、10年近い年月を共にしてきた仲である。その名が憎かろう筈はあるまい。自分が受けた傷よりも相手に与えた傷の方が痛ましく思えてくるし、不幸に終わった女性との思い出はいつまでも恋しく忘れ難い、と言っていた Hazlitt のことである。結婚までしたのに相手を幸せにできなかった残酷さは、なおさら痛ましく悔やまれたことだろう。

そしてここにまた、Sarah という名の女性が登場する。Hazlitt より年上の Mrs Siddons や妻とは違って、今度は19歳のまぶしいほど若く魅力的な娘であった。彼は42歳になっていた。もう若いとは言えない自分の年令を考えて、彼はこの恋こそ、自分の青春との訣別を告げる最後の恋になると思ったであろう。その恋が彼の以前のどの恋よりも激しく、未練も強くなっていったとしても無理はあるまい。それに加えて、女性に好かれることの少なかった彼の、女性に対する一種の屈折した偶像崇拜でもあろうか、好きな女性を見ると自分の理想の女性をその中に想像して、女神のようにそれを崇拜するという傾向が異常に強かった。はじめから女神とまでは言えない女だとしても、自分が惚れた以上、崇拜できるような女性に仕立て上げるため、恋人の人間教育に熱中したのである。Pygmalion が象牙を刻みながら自分の理想の女性を追求したのと同じことを、Hazlitt は生身の人間に向かって懸命に試みていたのである。その相手は誰が見ても尊敬できるような立派な女性である必要はない。彼の好みに合いさえすればよかった。友人たちが意外に思うような女性でも、彼女を自分の女神の顕現とさせるには十分であった。ただ、女性が彼の過分の期待に答えてくれるかどうかは問題なのだ。今度の Sarah Walker の場合も、友人たちは Hazlitt がつまらぬ女性に向かって、例のごとくひとりよがりの妄想をたくましくしていると思ったのか、彼の恋に味方する者は一人もいなかった。*Liber Amoris* にある友人からの手紙も、Hazlitt が Sarah に未練を持つのはあらゆる意味で好ましくないと忠告している。そのような手紙を Hazlitt が載せたのは、あるいは、孤立無援になった恋の主人公の苦しみを強調したかったからなのかもしれない。実をいえば、人が夢中になっている事柄、特に恋愛などで他人が説教がましく口出しすることほど、彼が忌み嫌ったものもないのである。

「友人は我々のために何でもやってくれそうに見えるが、実はそうではない。彼らが我々にいつでも喜んで与えるものは一つしかない。我々が望みもしない忠告である。」<sup>103</sup>

「ひどく苦しんでいる者に向かって、涼しげに道を説く人たちの言うことなど聞きたくもない。言葉でもって他人の苦しみを取り除けるものなら、やってみるがいい。それが成功するようなことがあるなら、お説教も静かに聞いてあげてもいい。」<sup>104</sup>

「およそ私が憎むものの中でも、真実と自然の感情に逆らうような常識を持ち出される説教ほどいやなものはない。」<sup>105</sup>



人と妥協することを好まぬ独立心が強かった父親牧師の影響にもよるであろう、Hazlitt は自尊心の強い男であった。そのことが彼の孤立癖を養ったのであるが、その自尊心が彼の女性関係では完全に裏目に出た。彼は「自尊心の強い男は恋には向かないそうだ。こういう男の手にかかると女まで聖人君子にさせられてしまうからだ」<sup>109</sup>と書いている。これは自分のことも言っているのだろう。彼の恋が常に片想いで終わった理由の一つを説明することにもなっている。つまり、相手の女性を自分の理想に近づけようとして熱心すぎて、女の方がたまたまなくなって逃げ出すのである。

フランスを競争相手に仕立てて物を言う傾向があるイギリス人一般の例にもれず、Hazlitt もフランスとフランス人を引き合いに出すことを好んだが、他のことはともかく、女性のことになると、どんなにひいきめに見てもフランス人の方がイギリス人よりも上だという意識が彼から消えなかった。冬の寒い一日、パリでは果物売りの娘がヴォルテールやラシーヌを読む風景がいたる所で見受けられるのに、ロンドンの売り子が手押し車の蔭で Shakespeare を読むなど想像もつかぬ、と言っている。イギリス娘はどうしても田舎者の無教養が目立って、洗練された優雅なものを好む Hazlitt には物足りないのである。おそらく Sarah は教養もなく、洗練されてもいないのに誇りだけはめっぽう高い傲慢無礼な典型的イギリス娘の一人にすぎなかったであろう。彼の苦勞に値いしないような女のために教化改善に熱中して女から愛想を尽かされるという極端な例が Sarah Walker との恋である。

Hazlitt が Sarah に語って聞かせた話や、読むようにといて勧めた本など、いずれも高級な文学・哲学・芸術である。彼の崇拜人物ナポレオンの胸像まで、そのようなものには全然興味を示さなかった彼女に無理矢理受け取らせている。二年ほどして彼女が絶交宣言した時には、これらの品物は全部、彼に突き返された。教養のない若い娘には、Hazlitt が親しんできたような高尚な精神世界について行くことはとてもできなかったであろう。だが、Sarah にも罪はあった。自分の誘いに乗った男が本気で燃え立った時、彼女はその炎を盛んにあおり立てて、彼が苦悩するさまを見て楽しんだのである。女はたとえどんなに男の情熱をかき立てようと、所詮は情欲の世界の相手にすぎないのであって、精神的なものなど一切かわりのない生き物なのだという、Hazlitt の激しい女性不信の出所はこういうところにあるのだろう。しかし、情欲の世界で男を手玉に取ることしか考えないような女は自分の命がけの恋に値いしなかったと気がついて、一度、火がついた心と身体はもうどうにもならないのだ。彼は書いている。

「一度、恋にとりつかれたら最後、何がわかれとうとう駄目だ。毒を飲んでそれが毒だとわかって、それによって毒を血管から追い出せるわけではない。かくして情欲は心の中に毒を残すのである。」<sup>110</sup>

「おそまきにせよ、女が自分の愛に値いしない相手だったと気づいたからといって、我々はそれまでの狂った執着から目ざめるわけではない。女の性質と美しさ可憐さは別物である。たとえ性質には失望させられても、その分、美しさ可憐さがとりわけ魅力的に思われてくる。実を言えば、恋する男には他のどんな思惑よりも情欲が物を言うのであって、美德などよりは女らしさの方がはるかに大切なのである。タチの悪い女だとわかって、そのこと自体が男には可愛らしく思える。」<sup>111</sup>

身体の魅力だけを売り物にして男を見下す女に誇りを傷つけられ愛想を尽かしながらも、なお、女なしではおれない男の宿縁を語って言い残すことがない。女はもうこりごりだという気持を何度味わわされながら Hazlitt は片想いに燃える恋を重ねて、今ふたたび強烈な、生涯最大の試練の

時を迎えたのである。

しかし Sarah Walker との恋が Hazlitt の最後の恋になった。それが絶望だとわかった時、彼はほとんど行きずり同然の女性と再婚して、これまた一年とたたずに逃げられ、その後は幽鬼のように下宿に閉じこもり、やがて大病を得て死ぬ。Sarah との恋で彼の夢と想像力の一番大切な部分が、彼の身体もろとも燃え尽きてしまったのである。

#### IV

Sarah との恋は Hazlitt 的な恋の象徴でもあった。恋することの喜びと悲しみの幻想が彼を酔わせ、現実が彼を絶望させたのである。女から愛される喜びは彼の想像の世界の出来事であって、それを身をもって味わうことは彼にはほとんどなかった。彼の恋は、報いられぬ恋を恋する孤独な作業であり、そのような愛され方を好む女性などいる筈はないから、彼の恋人は実は彼の空想の中でしか存在しなかったのである。かつてピグマリオン伝説は彼に、女を愛することは享楽を欲することであり、享楽することができなければ女を愛することはできない、と教えた筈である。〔愛が報いられなければ我々は女を心から愛することはできない。さもなければピグマリオン伝説は意味を失うだろう。〕<sup>29</sup>

しかし Hazlitt の愛が報いられないとあれば、享楽することもまた、彼には不可能となる。望みがかなえられたピグマリオンとは違って、彼には享楽する喜びが得られなかった。欲望するだけで、報いられぬ愛に苦しまなければならなかったのである。

「享楽するよりは欲望すること、愛されるよりは愛する方がよい」<sup>30</sup> という彼の言葉は、愛の賛歌などではない。相思相愛の恋を体験できずに、想像の中で恋を恋するほかなかった男の自嘲的な自己弁護と言うべきであろう。享楽することができない愛を人に勧めたり、愛されるよりも愛することをよしとするような禁欲、克己の教えは Hazlitt には似つかわしくないからである。女性との交際で彼が理想としたのは、自己否定的なものとは違う、自由でおおらかな、何物にも捉われることの無い、モンテーニュ的なものであっただろう。たとえユートピアを夢見るようなもののだとしても Hazlitt が理想としたのは、モンテーニュが愛したような意味での、自然なエピキュリアンとして生きることであろう。「同情するにはこちらまで息苦しくなるような禁欲とか克己とか、およそ自己否定的な行為は尊敬には値いしても、我々はそれを真似したいとは思わない」<sup>31</sup> と Hazlitt は自分でも言っているのではないか。

女性不信を盛んに口にしながら、その半面、彼に著しかった女性と恋の賛美は、彼の愛に報いてくれない女性全体に対する彼の反感と不満の裏返しである。不満・反感が強ければ強いほど、女性の魅力と恋の魅力は、彼の中でますます強まる。これも一種の昇華作用であろう。

「君の恋に答えてくれない女をひたすら愛してみよ。もしも君に対する女の軽蔑と冷淡が、君を想い、君を愛することになるとしたら、君はどんな気持ちになるかを考えてみたまえ。そのときめき、歓喜、一つに溶けあう二つの心、女の中にもう一つの存在を創造すること——その瞬間、君は自分が今まで女を半分も愛していなかったことを悟るだろう。」<sup>32</sup>

冷たい女が急に別人のようになって我々を想い、愛してくれるというようなことは空想の中ではありえても、現実ではめったに起こるものではない。恋も愛も友情と同じように自然発生的なものであって、努力や強制から生まれるものではないことは Hazlitt も認めている。〔友を得る法とい



うものはない。なるようにしかならない。無理に求めても得られないこと、恋と同じである。』<sup>64)</sup>

女が自分を愛してくれることを想像せよ、云々、は、Hazlitt の恋が空想の産物であったことを期せずして告白するものであろう。その空想が美しければ美しいほど、残酷な現実には彼を傷つけ、その傷を癒やそうとして彼は更に空想を美化してゆく。彼の女性観が、よかれあしかれ、しばしば極端な表現を取るのは、理想と現実との相剋が彼を思う存分、翻弄するからである。考えようによっては、恋に空想はつきものであるから、Hazlitt の恋も、その点では常人の恋と少しも変わらないという見方も可能であろう。しかし恋に成功したことのない男が、空想によって恋を作り出し、その中に溺れることを何度も繰り返しながら女性と恋の本質の重要な面を浮かび上がらせるというのは尋常なことではない。不幸を身にしみて味わわされることなしに真実を教えることは不可能である。この場合の真実とは、ハズリットの恋に限って言うなら、女は永遠に魔性のものだということである。

「女のやさしさは男の魂を誘う魔法の媚薬であり、それが魅する力は永遠である。なぜそれほどまでに人を魅了するのか？ 女が発散する女らしさは絶えまない歓喜と静かな安らぎの象徴であり、何物もそれを阻むことはできないし、しかも常に変化しながら、あらゆる状況に適応してゆくからである。』<sup>65)</sup>

「変化しながら、あらゆる状況に適応してゆく」というのは、たとえば言えば、場所に依じて色が変わるというカメレオンのように、女は自由自在に変身するということである。これを Hazlitt は女のクエーカー教徒について書いている。男のクエーカーといえば、それはもう風変わりな思想と高慢の固まりであるが（そう Hazlitt は言う）<sup>66)</sup>、女の場合は同じクエーカーでも、人前では実に巧みな変身ぶりを見せるので、他の宗派の女性と全く見分けがつかない、というのである。

なぜか？ その理由はこうである。

「女は境遇や教育によって毒されることが男の場合より少ない。習慣や先入観の型にはまる度合いも少ない。自分の境遇を顧みて劣等感を持つことも男より少ない。女は自己流の知恵と抜け目なさをいつも思う存分發揮して自分を引き立たせるのである。女独自の機能が常に屈託なく美しくほとぼしり出るさまは——女とはそういうもののなのだ——まるで林の中の細い木々のようである。男の知能のように、古色蒼然たる庭にはえているしなびた猿スベリのように枝を切り払われ、幹を切り倒され、ねじまげられてしまうことがない。女は男よりもはるかに柔軟にできている。』<sup>67)</sup>

たとえ女の魅力が魔性のものであるとしても、その美しさと恋を称えた Hazlitt の賛歌は、男性の永遠の憧れをこれ以上に美しく表現することはできないと思われるほど見事に言い表わして、しばしば感動的である。下の文章など、その典型的なものであろう。報いられなかったとしても、身も心も燃え尽きるような恋をした Hazlitt という男がこの世に遺した最後の言葉は、“Well I've had a happy life.” であったと我々に伝えた息子は、父親をよく理解していたと言わなければならぬまい。

「人生のみじめさ、むなしさを愚痴る者がいたら、次のように言ってあげるのが一番よい。《人生のいつの時期にか、恋をしたことのない者は一人もいない》と。恋の持つ、あの高揚した感情、

あの深さと純粹さ、強烈な浄化作用は、どんなつまらぬ人間にも一度は訪れる。恋がいかに神聖、甘美なものかを考えるなら、これ一つだけでも人間であることを慰めてくれるではないか。恋の香料のひとつは人生の苦杯を芳醇な酒に変え、神の歩む道を人類に指し示すのである。』<sup>94</sup>

末尾の「神の歩む道……」は Pope の *Essays on Man* 中の有名な一行 “And vindicates the ways of god to man” から取られたが、人間の恋を神の歩む道にまでたとえたのは、Hazlitt の恋愛賛美もここにきわまれりと言うべきであろう。

Hazlitt にとっては、恋を神の住む世界に昇華したほど、女は永遠に美しく気高い存在であり、それを慕う男の夢は純粹なのである。彼の恋を調べれば調べるほど、実はそれはプラトニック・ラブだったのだという推測が強まってくる。あれほど激しかった Sarah Walker との恋でも、この世で果たせなかった夢を、せめて墓の中で一緒に眠ることによって果たしたいという言葉で表現している。彼女が死んで土の中に横たえられて微生物がその美しい肉体をむしばむことを想像しながら、彼は自分ができなかったことを果たす物たちの上に、思いを馳せている。彼の女性関係の実体はいまもって不明のままであるが、彼と仲たがいがいた Wordsworth や Coleridge たちがそれについて語っているような、無頼のものでは決してなかったであろう。

## V

Sarah Walker との恋は Hazlitt の恋の象徴であったというだけでなく、最も激しい形で表現されたという意味で、一種の完成型と言ってもよい。自分を愛してくれる女性にめぐり会えなかった男が、人並みの結婚生活を全うできずに晩年にさしかかろうとしていた時のことである。妻と別居中という境遇も手伝って、一人の魅力的な若い娘の気まぐれが、彼の今までの不幸な恋の総仕上げでもあるかのように、彼を今度こそは回復不能になるまで破滅的な状況に追い込んだのである。Sarah との出会いには、それ以前の彼の女性関係とはやや異なった、更に不運な要素が加わっていた。Sarah の姉が、つい最近、ケムブリジ大学出の法律家であった下宿人と結婚したばかりで、Sarah もそれに刺戟されて自分も姉にならおうという気を起こし、まず手始めに、身近かな下宿人から未来の亭主を物色しようと考えていたところに Hazlitt が投宿したのである。それを迎えた Sarah には男を誘惑する下地ができていた。

彼女は Hazlitt が作家だということに興味を持った。作家の客は珍しかったし、姉の夫に引けを取らぬ、れっきとした紳士でもある。妻と別居中という彼の身の上についても両親から聞かされていたであろう。しかし、彼が四十過ぎの中年男性で自分はまだ二十歳前だという年齢差も彼女は意識していたかもしれないし、いくら亭主を物色中だといっても、Hazlitt を迎えた時、彼を結婚の対象として彼女が本気で考えていたかどうかは疑わしい。

だが、お互いに不運であったのは、たとえ Sarah が Hazlitt を本気で誘惑するつもりはなかったとしても、相手が男性と見れば誰彼の区別なしに媚びを売る癖が彼女にあったこと（これを彼女の母親はほとんど天性的なものだったと言っている）、妻との不和が独り暮らしの Hazlitt に、女性の誘惑に負けやすい状況を作っていたということである。幸せな家庭を持つ夢も破れて心重い单身生活を送ろうとしていた時に、若い魅力的な娘が現われて、仮りにたわむれ半分だとしても媚態を示しながら近寄ってきたとあっては、Hazlitt ならずとも大抵の男なら無事を全うするのは容易なことではあるまい。これが Hazlitt を根底から狂わせただけではなく、Sarah 自身にも、未熟な小娘の火遊びの当然の罰かもしれないが、予想を上回る成り行きとなって、驚いた彼女がその危険から身を引くために、思わぬ苦勞を強いられることになる。妻と離婚するなら結婚してもいいと言う



彼女の約束を信じて、厄介な離婚手続を済ませて帰ってきた Hazlitt を振り切って逃げた後の彼女の人生航路は詳しくはわからないが、彼よりも半世紀近く生き長らえた彼女の軌跡が明るいものであったとも思えない。多分、William Hazlitt という、世に知られた一本気な文人を手玉にとった悪女の記憶を自分自身と世間から隠しながら一生を送ったのであろう。

しかし今は、これから先そのような運命が待ち受けているなどとは思っても寄らず、Hazlitt と初対面の朝、彼の部屋にお茶を運んだ時、得意の媚態を演じて見せたのである。これが我々と彼女との最初の出会いであった。他の男なら、若い娘のそのような仕草を見ても、あるいは笑って済ませたかもしれない。しかし Hazlitt にはそれだけの経験も度量もなく、また女性の軽はずみにつけ入るような恥知らずの度胸もなかった。「女性のこれ見よがしのしとやかさは、やさしさ、繊細さ、純真さを人に印象づけようという下心から生ずるのであるが、そのかよわい変装の下に、わざとらしさと不敵さと非情が常に見え隠れする」<sup>92</sup> というような彼の言葉も、Sarah に捨てられてすべてが水泡に帰した後に、彼女のことを思いながら書かれたものであって、そこにあるような用心の戒めは彼の身を守るためには何の役にも立たなかった。たとえそのような知恵が予じめ彼に備わっていたとしても、女性の残酷さを憎む彼には、その残酷さや非情など似つかわしくない女性特有のやさしさ、あわれさ美しさをいとしく思う気持ちがいつも共存しているから、結局どのような用心、戒めも、彼の実際行動には役立たなかったであろう。ここにも書かれているような女性不信は、女性に対する彼の性急な欲求と、それが報いられない不満と関係がある。その不信は一種の敗北感、あるいは女性に対する劣等感の裏返しでもあるから、それが生み出す彼の女性観がしばしば極端に片寄ってくるのも不思議ではない。次の箴言など、そのような劣等感を如実に示すものである。

「男が一人の女に嫌われたら、すべての女に嫌われるだろう。女は個人としても全体としても、同じ一つの鍵しか持っていない。女同士の秘密協定ともいうべきか。それによって男の品さだめをする。」<sup>93</sup>

Hazlitt は彼のエッセイのどこかで、女性は男性よりも外観で人を評価する傾向が強く、内面的な部分を見ようとしない、と言っていたが、女性のそのような性質こそ彼ら独自の秘密協定というべきものだろう。しかし一人の女に嫌われたら、すべての女に嫌われるだろうというのは完全な誤りである。一人の女に嫌われても別の女からは愛されることなど日常茶飯事であって、むしろ、女に嫌われ、憎まれたことが一度もないような男には女に愛される資格はない、と言った方が男と女の真実に一層近いかもしれない。あるフランス・モラリストは、女を一度も泣かせたことのない男は、女を一人も幸せにすることはできないと言っていた。一人の女からも愛されない、と言った方がもっと正しいかもしれない。Hazlitt はどの女をも泣かせはしなかった。泣いたのは Hazlitt の方であり、それを見て女たちは彼に愛想を尽かした。すべての女に嫌われるようでは、どの一人の女からも愛されるわけではない。女性の前に出ると緊張してしまって恥ずかしい思いをするからといって自信喪失し、それがいつまでも彼の度はずれの敗北感・警戒心となって残るということは、それと似たようなことが彼の人間関係一般について言えることなのだが、特に女性関係の場合、彼がいかに熱しやすく傷つきやすかったかを物語っている。彼の不幸な女性関係は、彼の一般に恵まれなかった人間関係のあり方を極端な形で表わしているようにも思える。

彼の人間関係が概して不幸であったのは、彼の自尊心が強すぎて、人に負けまいという意識が余分に働いたことが大きな原因となっているだろう。本当の意味の自尊心は決してそのような負け嫌いのことではなく、彼が自分でも言っているように、もっとおおらかなものの筈である。(「真に誇

り高い人間は自分の上にも下にも人を置かない。上を認めることはしないし、下を見下すこともしない。」<sup>90)</sup>しかし彼の場合、人並み以上に目立っただけは、人に対する対抗意識が壁にぶつかって敗北感、劣等感を生み出し、これが攻撃性となって表われてくることである。たとえば彼が書いたイギリス国会演説論を見ても、彼が関心を寄せていたのは発言内容だけではなく、それに劣らず政治家たちの弾劾演説のやり方、反論、攻撃の仕方そのものにも及んでいたことがわかる。国会演説に限らず、議論、反論の巧みさという面から、これについては誰もが一目置いた論客のBurke や Dr. Johnson などの発言を彼がどれほど繰り返し読んでいたかわからない。彼自身も攻撃的な文章を得意としたが、中でも政敵 William Gifford へあてた手紙(1819)は抜群のもので、Keats はこれほど迫力ある文章を見たことはないと言って絶賛していた。ただ、その攻撃性が一般の人間関係の場で発揮されることによって自分が受ける反発がこわい。Hazlitt が憧れても手が届かぬ女性に対する時はなおさら、敗北感が攻撃性を強めるし、それが彼にはね返ってくるのである。

しかし人間である以上、どんなに人間を憎もうと、他の人間から完全に孤立して生きてゆくことはできない。相手が女性ともなれば、その媚薬から完全に免かれることは更に難しい。Hazlitt のような情熱的な男には、この世に美しい女性ある限り、安住の地はないのである。

「図々しい女なら誰でも男をまどわすことができる。女がなれなれしい態度で男に愛想よく振舞うのを見て、これは自分に好意を持っている、あるいは自分にも案外、魅力があるのかもしれない、という気を起こさない男は一人もない。顔にまるで自信が持てないというのなら話は別だが、そうでもなければ、少しでも色気の残った男なら、これでもう一卷の終わりである。」<sup>91)</sup>

Sarah Walker との恋に破れて数年後に彼は書いた。

「ある種の動作は話のうまさや顔の美しさよりも、もっと人の心を惹きつける。物腰が優雅で、なんともいえない落ち着きがあり、それが表情と声音のすべてに表われているような女がいると想像してみたまえ。このような女に出会ったら、ぶこつで神経質な男は一発で参ってしまう。全身全霊を占領されてしまう。彼女が部屋へ入ってくると、やさしい音楽が流れ入ってくるようだ。彼女と出会ったら最後、その姿が見えない所では生きた心地がしない。彼女から引き離されることは自分自身を永久に失うことだ。」<sup>92)</sup>

恋が報いられないと知った時の Hazlitt に残された道は一つしかなかった。失恋を自分の想像の中で極限状況にまで押し進めることによって、絶望的な主人公を演ずる自分自身に酔い痴れることである。彼は女の魅力と残酷さ意地悪さのすべてと、それによって翻弄される男の悲劇に酔った。想像の中で、とは言っても、現実には相手が存在する以上、恋を成就させたいという欲望がおさまる道理はない。空想の中の悲恋は彼をしずめるどころか、逆に恋の炎を更に激しくあおり立てるばかりで、彼一人の中に燃えさかるその炎を消すことは、もう誰にもできなくなったのである。

## Ⅵ

その恋のいきさつを述べた *Liber Amoris* は Hazlitt のただ一つのフィクション風の書き物で、全体は三部に分かれている。第一部が主人公の男女の対話、第二部と三部が友人にあてた主人公 Hazlitt の手紙である。「主人公 Hazlitt」と言ったのは、その手紙の全貌が、後に集められた彼自



身の書簡集に明らかにされているからである。対話は、冷たい女に向かってひざまづかんばかりに求愛と哀願を繰り返す男の言葉と、それに対する女のそっけない返事から成り立っている。実際に Hazlitt と Sarah との間にやりとりされたものの中から思い出を辿って劇的效果を考えながら選出されたのであろうが、対話劇として決して成功したものとは言えない。Hazlitt の本領が発揮されるのは散文の手紙である。その中で、エッセイを書く時にはある程度おさえられていた感情が、きわめて個人的な主題を得て、遠慮なく溢れ出ている。真っ正面から物事を語ることを好んだ彼も、自分の感情をこれほど美しい文字に結晶させたことはなかった。劇やフィクションが彼の領分ではなかったことがわかるというだけでなく、恋こそ彼の人生最大の主題であったことを、期せずして我々に語っているように思える。その手紙は彼の恋を自ら語った唯一の文献であると同時に、彼がエッセイに書いてきた幾つもの女性論の本質的な部分を最も切実に言いあらわしているという意味でも、貴重な資料である。文学的価値も、彼の最もすぐれた personal essays のそれに劣らない。時によってはそれを上回るものがある。

ただし、作品に付けた広告では、恋に破れた友人の手記ということになっている。あれほど膨大な分量のエッセイを書いているが、その中で私事を語ることはめったにしなかった Hazlitt のことである。人間の個人的な部分でもこれほど私的なものはないという、恋の秘めごとを明らかにせずにはいられなくなったのは、そうでもする以外に救いはないほど、その恋の未練が強かったからであろう。そのような告白を彼は自分の恋愛と離婚の自己弁護の道具にしようと思論んだのではあるまい。彼はやはり作家であった。心にわだかまる大きな未練をありのままに書いて、それから解放されたいと思ったのであろう。未練が一冊の作品になって昇華されれば、それこそ願ってもないことだし、更に、わざわざ本名を名乗って自分の離婚の直接の理由を天下に公表するまでもないと考えて、匿名で出したのであろう。実在する Sarah という女性はもちろん、関係者に迷惑をかけたくないという気持が Hazlitt にあったことは、手記を書いたことになっている「友人」の気遣いを述べたくだけからも察せられる。

しかし匿名で発表したにもかかわらず、主人公と「編者」が Hazlitt であり、その本の内容が実話だということはすぐにわかってしまった。世に出るとは予想もしていなかった Sarah への恋文の原物の一つが暴かれたのである。Sarah 自身が公表したとは考えられない。おそらく、彼女と Hazlitt の関係を知る第三者が Sarah に断わりなしに出版社に売りつけたのだらうといわれている。彼女が交際していた男の誰かが、世間でも名の通った文士 Hazlitt の恋文を見せられて、金銭目当てにそれを盗んだのであろう。現にそれを載せたのは Hazlitt の政敵にあたる保守系の新聞 *John Bull* (1823年6月22日の号) であった。このおかげで、他はすべて行方不明になった、Sarah に渡った彼の手紙の貴重な一通の全文が私たちに伝わった。その手紙が新聞にそっくりそのまま載っているのを見て Hazlitt は愕然としたと言っているが、迷惑したのは Hazlitt だけではない。結婚前の Sarah の受けた打撃も大きかったであろう。その手紙は政敵はもちろん、彼に好意を持たぬ者たちの利用するところとなり、彼は散々に叩かれた。理想家気取りの革新主義者 William Hazlitt の女狂いはこのとおりだ、といわんばかりの逆宣伝に、スキャンダルに敏感なイギリス人は湧いた。*Liber Amoris* を作品として評価し、弁護する者もいたが、意地悪な攻撃によって失われた彼の声望を回復するまでにはいたらなかった。孫の W. C. Hazlitt が編んで出版した時も(1894年)匿名のままであった。その時、二人の恋に直接かわり合った者たちの中で、ただ一人生き残っていたのは Sarah の妹で、既に90歳を越していた。彼女はあと一年で二十世紀という時まで生きのびた。

*Liber Amoris* のまえがきは次のようなものである。

「この手記にある出来事は、一人のスコットランド人の身に、つい近頃、起きたことである。彼は政治的に迫害された上に、無分別な結婚をして失敗し、若くして祖国を離れた。それからかなりの年月がたって、ここに書かれているような恋をして壊滅的な打撃を受けた。そのいきさつをこの手記にまとめると気分転換のため大陸に旅立ったが、まもなくオランダで世を去った。思うに、その不幸な恋が、彼の繊細で内攻的な魂を痛く毒したことが彼の死期を早めたのであろう。彼は自分の魂を占領した生涯最大の恋の記録を、死後もそのまま残しておきたいと願っていた。友人として私がその原稿を委託されたが、中でも稚拙な部分や重複する箇所は（特に第一部の対話）削除してもかまわないと言われた。しかしどの部分にせよ、公表するとなったら、それは一字一句たりとも変えてはならぬという固い約束だった。その約束を私は守った。彼が人名や地名を別のものに変えている場合もあるようだが、それはこの手記が公表された時、それを読む者の興と同情をそぐような不都合が生じないようにという、彼の配慮からなされたものであろう。」<sup>64</sup>

主人公をスコットランド人にしたり、失恋して大陸へ渡って死んだ友人の遺した手記にしたりするようなフィクション設定は、Hazlitt にしては珍しい。「無分別な結婚」とか、「壊滅的な打撃」、「繊細で内攻的な魂」、などというのは、いくら隠そうとしても本音を吐かずにはいられなかった Hazlitt の心情を表わすものであろう。傷心のあまり死んでしまったというのは面白い。このような一つ一つの記述が、彼の恋がどのようなものであったかを告白している。拙い部分、特に対話は適当に削除してもよいと言っているところを見ると、劇的な効果を上げる工夫として対話の形を取りはしたものの、劇を書くのは案外難しく、対話の内容も状況も稚拙で迫力を欠いたことを本人が認めていたことがわかる。舞台は下宿屋の中の Hazlitt の一室に限られているし、他に登場人物もなく、書かれているのは二人の間の会話だけである。男の一方的な恋の告白を聞かされる女の受け答えも単調すぎる。恋に夢中になった男の言葉と、女の冷たい返事だけを書き並べても劇にはならない。一本調子で盛り上がりがない。しかし公表するなら一字一句たりとも変えてはならぬ、というくどりは、たとえ作品としての成功はおぼつかないとしても、そこに書かれた感情はまぎれもなく自分のものだという作者の心を感じさせる。これは正直第一を信念としてきた Hazlitt には自然なことであろう。この一作に見られるフィクション設定は上手とは言えないが、今までフィクションを書いたことがなく、もっぱら、主題を真っ正面から論ずることを得意とした彼の持ち分を考えてみれば、彼の唯一のフィクション的試みとしてはこれが精一杯だったのであろう。

しかし、もしかしたら、彼にはフィクションを書くつもりは最初からなかったのかもしれない。たとえ架空の人物が書いたことになっているにせよ、本物の手紙をそっくりそのまま使って、それが作品の三分の二を占めるというようなフィクションもあるまい。設定や構成の未熟さをあげつらうよりも、彼がなぜ、このような形で書かなければならなかったのかを考えるべきだったかもしれない。彼は、人の personal なものの極致とも言うべき恋の未練を、今までに自分が書いたことのない型破りの形で書こうとしたのかもしれない。我々が勝手に考えたような、フィクションの形を借りて劇的効果を上げたり非難のはこさをかわそうなどという気持は彼にはなかったのではないか。彼が取った方法以外に彼の恋を語ることはできなかったのかもしれない。

第一部は七つのエピソードと、その中での Hazlitt と Sarah の会話と、Sarah への手紙、そし



て Hazlitt が Keats の詩 *Endymion* に書きつけたメモ、最後に、Sarah に贈った Shakespeare の *Troilus and Cressida* の一節から成っている。

第二部は友人 P. G. Patmore (1786—1855) に出した Hazlitt の手紙13通と、その友人のもの1通、それに箴言風の断想4篇であり、最後の第三部は別の友人 J. S. Knowles (1784—1862) に書いた長文の手紙で締めくくっている。そこで中断したと言った方がよいであろう。報いられぬ Hazlitt の恋の物語に完成はなかったからである。

ここに使われている手紙はもはやフィクションなどではなく、Hazlitt 自身のものだということ は既に述べた。第三部の長文の手紙だけは実際には出されず、彼が手許に置いたという説があるが、その真偽はともかく、これも Hazlitt が書いたものであることに異論はない。

第一部の Sarah あての手紙の一つは、その原物が何者かの手によって盗まれ、出版社に渡されたという、先述のいわくつきのものである。Hazlitt が載せたのはその抜粋である。Sarah は Hazlitt 死後半世紀を生きながらえ、同棲した男との間に息子が一人いたらしいが、Hazlitt の手紙は彼らの許からは遂に出てこなかった。その息子は、どういうわけか、籍に入れられぬまま、どこでどう なったのかもわからない。

第一部の対話は、書くことによって不幸な思い出を昇華させるつもりで書かれたのであろう。二人が共にすごした日々の思い出をよみがえらせるためには、その時に交わされた言葉々々を再現するにまさるものはあるまい。ただ、恋人の中に理想の女神を想像することを好んだ Hazlitt のことである。女神は寛容で慈悲深い筈であるから、女が裏切っても彼は容易に望みを捨てなかった。それが彼に未練を育むことになる。恋の悩みは理想と現実の相剋の一つの表われでもあるから、失恋の思い出にふけることはその相剋を呼び戻すことである。そのような恋を書きとめても昇華の働きをすどころか、かえって相剋を繰り返すだけのことになるだろう。*Liber Amoris* の中には、失恋の未練を絶ち切って新しい生き方を目ざす主人公の可能性を予想することは難しい。彼はそれを書きながら絶望を深める文字を刻んでいたのである。

絶望的なことを書いたからといって、人が本当に絶望してしまうとは限らないし、むしろ、それを書くことによって立ち直す手がかりを掴む方が普通だとも言えよう。Hazlitt の場合も、文字どおり絶望してばかりいたとは限らない。しかし Sarah の面影が彼のその後の人生のいたるところにつきまといていたことを考えると、Sarah の思い出を書きとめたことは彼には昇華作用にはならなかったように思われる。作品が昇華作用として働くかわりに、前に広告で主人公が、恋を記憶するための手記としたいと言っていたとおりの結果になったのは皮肉なことと言うほかない。

Hazlitt の恋を人は狂恋と呼んだ。しかし Hazlitt に言わせれば、恋は狂った者同士のすることであり、恋に常識は通用しないのである。狂った者同士のする恋に、もし Hazlitt が人並みの幸せを味わったとすれば、それは彼の精神が狂っていた証拠であろう。逆に、激しい恋が彼を破滅に追い込んだとすれば、その犠牲者となった彼は、きわめて正常な人間であったと言えるだろう。女性を持つ媚薬は、やはり Hazlitt が言うように、理屈や常識では説明のつかない魔法なのである。その魔法が男の魂を魅了する力は、それが Hazlitt の中で思う存分発揮されたように、永遠に無敵であってよいではないか。

Sarah の言葉を信じて彼は約束どおり離婚して Sarah の所に戻ってきたというのに、彼女に裏切られて怒り心頭に発した彼は宿じゅうに響きわたるような大声で狂い叫び、宿から叩き出された。Sarah とは二度と会えなかった。話し合いも拒絶されて彼は手紙を出した。

「君と別れた日、私の涙は永遠に潤れたように私には思えた。しかし今これを書きながら涙があふれ出る。もしもこの涙が止まるようなことになったら心臓が張り裂けるだろう。」<sup>97</sup>

そして *Endymion* の頁に書きつけた。

「私を導いてくれる手がほしい。私を慰めてくれる眼がほしい。そして私を憩わせてくれる胸が！ それらすべてはもう私にはなくなったのだ。愛の喜びを知ることなしに醜い姿になって、私はまもなく墓の中に崩れ落ちて行くだろう。だが、彼女のやさしい面影を思うと、彼女が私を憎むなんてことがあるものだろうか。あの美しい顔と豊かな髪——、私は誓って言う。われ、汝を愛す、と。あの静かな顔立ちと王妃のような優雅さ（これこそ全男性がひざまづき、崇拜すべきもののなのだ）にかけて、私は彼女を思いながら生き、死ぬことを！」<sup>98</sup>

第一部の最後に、Sarah に求愛していた頃、彼女に書いて渡した *Troilus and Cressida* の一節に Hazlitt は “A Proposal of Love”（愛の提言）と題して載せた。

「(そんなことが女にできるものならば——君ならできると私は思う)  
愛のともしびと炎を絶やさずに、  
若い時も不幸な時も節操を守り、  
血液が衰えてゆく速さに負けない速さで  
心を新たによみがえらせ、  
おもてに年寄る美よりも長続きする力を  
養ってくれるものなら、  
君を想う私の切ない心が  
君の心の琴線をかき鳴らしてくれるものなら、  
どんなに私は勇気づけられることだろう！  
だが悲しいことに、  
私は君を愛することしか知らず、  
恋の道も心得ない幼な子同然なのだ。」<sup>99</sup>

第二部は、Sarah とはじめて出会った運命の日（1820年8月16日）から一年半近い月日が流れて、二人の別れが決定的になった頃、友人に出した手紙である。

「……彼女が黒死病にかかって身体じゅうに斑点が吹き出したら、私はそれに手を触れよう。彼女が熱病にうなされたら私は彼女の唇に接吻しよう。かつてその唇から生命の糧を吸い込んだように、今度は死を飲み込もう。……彼女と最後に別れた時の私の重い心を表現することは、どんな言葉をもってしても私にはできない。あの時の私の足取りほど重く、悲しかった人間の歩みがこの世にあっただろうか。一步一步が彼女との距離を引きはなして行っただけだ。去った彼女の後を私の魂と心のすべてが追った。……私は死ぬかもしれない。しかし彼女を愛する私は死んではならないのだ。私が死んだら誰が私の愛したように彼女を愛してあげることができるだろうか。彼女が不幸になったら、誰が彼女を慰めてあげるのか。彼女が年老いたら、深いシワに刻まれた彼女の顔を見ながら、長生きしたことを一体誰が祝福してあげるのだろうか？」<sup>100</sup>



そして第三部の長文の手紙へと続く。そこにある感情は第二部と全く同質のものである。*Liber Amoris* の掉尾を飾る一節を挙げて、Hazlitt の恋を閉じることにしよう。

「……彼女の面影は、時が生み出すもろもろの廃棄物の中に埋もれてしまうのかもしれない。一本の雑草が波に乗って私から段々遠のいて行くように。しかし、そのあわれな一本の雑草が見えなくなった時、それも永遠に私から去ってしまった時、私の心を躍らす花の咲くことは私の生涯に二度とあるまい。」<sup>(1)</sup>

Sarah は Hazlitt 憧れの全女性の面影を一身に集めた、ほとんど女神に近い恋人であった。最初から最後まで、彼女は彼の手の届かぬ所にいたのである。そのような恋の結末は悲しい。だが、結末はどうあろうと、彼は文字どおり精魂尽きるまで愛した。それが彼の永遠の女神たちに対する“gusto”の証だったのである。

#### 注

- (1) cf. P.P. Howe(ed.), *The Complete Works of William Hazlitt*, Centenary Edition (Dent & Sons, 1934)——以下 *Works* と略——XII, 5—12.
- (2) *Works*, XVII, 98.
- (3) *Characteristics*, No. 243.
- (4) *ibid.*, No. 245.
- (5) *ibid.*, No. 246.
- (6) *Works*, VIII, 182.
- (7) cited above, Act I. Scene 3.
- (8) *Works*, IV, 71.
- (9) *ibid.*, 45.
- (10) *ibid.*, 91.
- (11) *Works*, XII, 301.
- (12) *ibid.*, XVIII, 227.
- (13) *Characteristics*, No. 87.
- (14) *ibid.*, No. 249.
- (15) *ibid.*, No. 250.
- (16) *ibid.*, No. 97.
- (17) *ibid.*, No. 322.
- (18) *ibid.*, No. 251.
- (19) *ibid.*, No. 350.
- (20) *ibid.*, No. 313.
- (21) *ibid.*, No. 205.
- (22) *ibid.*, No. 46.
- (23) *ibid.*, No. 313.
- (24) *ibid.*, No. 233.
- (25) *ibid.*, No. 352.
- (26) *ibid.*, No. 315.
- (27) *ibid.*, No. 315.
- (28) *ibid.*, No. 312.
- (29) *ibid.*, No. 126.
- (30) *ibid.*, No. 55.
- (31) *ibid.*, No. 112.

- ② *ibid.*, No. 56.
- ③ *Works*, XX, 278.
- ④ *ibid.*, IX, G.
- ⑤ *Characteristics*, No. 60.
- ⑥ *ibid.*, No. 248.
- ⑦ *Works*, IX, 113.
- ⑧ *ibid.*, 114.
- ⑨ *ibid.*, 115.
- ⑩ *ibid.*, 124.
- ⑪ *ibid.*, 162.